

祭りについての研究

社会B班：河田 萌・大矢 里菜・藤原 真帆

1. はじめに

現代の若者は「祭り」という言葉にどのようなイメージを抱くだろうか。祭りに出掛ける際にその祭りの目的、歴史について考えたことはあるだろうか。私たちは祭りが好きで、様々な祭りに出かけるが、「祭り」という行事の華やかさに魅かれ、ひとつひとつの祭りの目的や違いについて、あまり意識したことはなかった。しかし、祭りの歴史を知ればもっと深く祭りを楽しむことができるのではないかと思い、これを機会に祭りについて調べることにした。



2. 祭りの定義と調査方法

(1) 「祭り」とは？

広辞苑によると、そもそも「祭り」には、主に2つの定義がある。

- ① まつること。祭祀。祭礼。
- ② 記念・祝賀・宣伝などのために催す集団的行事。祭典。

この2つの「祭り」に分類し、日本の「祭り」について文献等で詳しく調べていくと、我々にとって身近な「四天王寺」にまつわる2つの祭りがあるということがわかった。そこで、それぞれの祭りに実際に参加しながら、比較検討することにした。

(2) 調査方法

聞き取り調査、フィールドワーク（実際に祭りに参加・主催者へのインタビュー）、書籍

3. 愛染祭り

私たちはまず、①のまつること。祭祀。祭礼。の典型的な例として、1400年間続く日本最古の夏祭りで、四天王寺に関連する「愛染まつり」に視点をあて、フィールドワークで得た情報と住職の方の話を参考に探究した。

日本では1年を通じて神社などで様々な祭礼が行われているが、主に農村漁村部の祭礼と都市部の祭礼に分別される。農村部では、稲作と結びついた祭りが中心で、稲作の無事と豊作を祈願すること、豊作に感謝することを目的に、春・秋に祭りが行われてきた。それに対し、都市部では物が腐ったり、疫病が流行ったり、疲れやすい季節である暑苦しい夏に、新たな活力を神から頂戴しよう、恐ろしい疫病を神の力によって封じていただくという新たな目的が生まれ、夏祭りが誕生した。こうした夏に向けて6月30日に行う「夏越しのお祓い」は「愛染まつり」の目的として現在でも続いているが、江戸時代以降に宝恵駕籠行列がはじまって愛染堂自体のご利益が注目されるようになったことで、そのご利益である商売繁

盛・愛嬌開運・恋愛成就を求め、愛染まつりに参加する人がさらに増えたのだと考えられる。「愛染まつり」も時代とともに少しずつ形を変えながら、継承されていることがわかった。

4. 四天王寺ワッソ

次に「祭り」の2つ目の定義「記念、祝賀、宣伝のために催す集团的行事。祭典。」にあてはまる祭りについて、同じ「四天王寺」にまつわる祭りである「四天王寺ワッソ」に焦点を合わせ、調査を進めていくことにした。「愛染祭り」と比べ、「四天王寺ワッソ」という祭りは、近年はじまった祭りである。この祭りを調べるために、私たちはまず実際、「四天王寺ワッソ」に参加し、その後、主催者へのインタビューや文献などを参考に調査を進めた。

四天王寺ワッソの歴史は大きく2つの時期に分けられる。1990～2000年にかけては在日の方々の祭りとして、2000年以降は地域に密着した「祭り」として大きく生まれ変わった。

「四天王寺ワッソ」は「在日の方々の思い」で始まった。在日の人々は、日本で暮らしながら、常に自分のアイデンティティを模索し続けてきた。こうした中で、1世の人々が子孫に向けて「自分たちがどういう存在であるのか」を考えて欲しいと始まった祭りである。

こうして始まった「四天王寺ワッソ」だが、2001年以降3年間、「祭り」は中断を余儀なくされた。しかし、「四天王寺ワッソ」を途絶えさせたくない、復活させたいという地域の人々の強い思いで、2003年、「NPO法人として大阪ワッソ文化交流会」が設立された。

このように「四天王寺ワッソ」は、日本と朝鮮半島の友好と交流の促進、さらには大阪の祭りとして継続性のある祭りになるようにと、たくさんの人々の思いが詰まった祭りである。

5. 考察

以上の調査結果から、二つの祭りを比較してみると、同じ「四天王寺」という場所を出発点にした祭りでも、その目的や背景は全く異なるということがわかる。

「愛染まつり」は、古代の人々が自然に対して畏敬の念をもって、神や仏などの霊的存在に祈願するまつりで、歴史が深く、大阪でもよく知られている。そして、時代の変化とともに人々の願いや、まつりの目的や形式も少しずつ変化してきているものの、古くからの伝統や文化を引き継ぎながら継続されている。一方、「四天王寺ワッソ」は、「愛染まつり」と比較すると、ごく最近始まった祭りで、多くの人々によって、試行錯誤を重ねながら創られ、大阪の祭りとして、新たな文化や伝統をつくりあげつつある現在進行形の祭りである。これからも変化と発展が続いていくと考えられる。

このように対照的な2つの祭りではあるが、共通する部分もある。それは、祭りを継承していくために多くの人々が携わり、そうした人々の「思い」を大切にしながら、現在までつづけられてきたものだということである。

私たちもその「思い」をしっかり受け止め、また、祭りに込められたさまざまな意味を理解して、祭りに参加していきたい。そして、「祭り」の伝統や文化を絶やさないためにも、より多くの人々に祭りに興味・関心を持って欲しいと感じた。

